

「15分宅配」米で成長

【ニューヨーク＝白岩 ひおな、清水石珠実】新型コロナウイルス禍で食料品宅配が急成長するなか、注文から15分以内と驚異的なスピードで配達する「超速宅配」が米国で広がっている。小売り大手の即日宅配は最短でも1〜2時間が限度だが、スタートアップ企業が提案するのは必要なきに必要なものだけを買う新たな消費形態だ。1兆ドル（約114兆円）超とされる生鮮食品市場の争奪戦が激しさを増す。

生鮮食品 気軽に注文 100兆円市場争奪



商品は配達員が電動自転車で届ける（Buykのダークストア内）



「ロボマート」は好きな商品を取り出すだけで買い物が済む

「Buyk（バイク）」は今夏、米ニューヨーク市でサービスを開始した。利用者がアプリを通じて注文してから15分以内に食品を依頼の場所に届ける。配達料は無料で最低購入金額の設定もなく、ペットボトルの水一本から気軽に注文できる。迅速な宅配を支えるのが、ミニ倉庫のような店舗「ダークストア」だ。現在、ニューヨーク市内に20カ所ある。年内に米中西部シカゴにも進出し、全米でダークストア

数を約100カ所に増やす計画だ。注文が入ると、梱包を担う「ピッカー」が店内を回って商品を集め、大型リユックに詰めるまでを約2分半で完了する。荷物は「クーリエ」と呼ばれる配達員が担ぎ、電動自転車で家庭やオフィスに届ける。配達圏内は各ダークストアから半径約1.5〜2キロまで。16日、記者が実際にニューヨーク市で試すと、2分ほどで「梱包中」から「配達中」の表示に切り替わり、注文後13分で商

品を受け取った。Buykを今夏に共同創業したスラバ・ボチャロフ最高経営責任者（CEO）は「卵や牛乳などを必要なきにすぐ購入でき、まとめ買いの必要がなくなる」と話す。注文から10分を切るサービスも登場した。10月下旬、カリフォルニア州ウエストハリウッド地区。警備会社で働くロナルド・サラスさんがスマートフォンアプリをタップすると、ミニバンを改造した走る無人スーパー「ロボマート」がわずか2分で姿を現した。到着後、再びアプリをタップすればドアが自動で開く。好きな商品を手

に取るだけで買い物が済む。商品のタグと車内のセンサーで商品を識別し、料金は事前に登録した利用者のクレジットカードに請求する。手数料は一律2ドルで、最低注文金額の設定はない。サラスさんは「店に向かず、短い休憩時間でも買い物できて便利」と話す。

調査会社によると、2021年に生鮮食品分野の市場規模は約1兆ドルとなる見通しだ。新型コロナウイルスで生鮮食品の宅配サービスが浸透し、小売り大手ウォルマートやインターネット通販最大手アマゾン・ドット・コムなど大手企業は即日宅配のサービスを相次いで打ち出した。

ただ、配達時間は注文から1〜2時間までが限度だった。人員や拠点数などの規模や展開地域の広さではなお大手に優位があるが、15分を切るサービスを掲げるスタートアップの参戦は業界のゲームチェンジャーになる可能性を秘める。